■ これからのテキスタイルデザイナーについて ■

新時代にふさわしいデザイナーが誕生し、それは、はっきりと二者に分類されると思います。

1.クリエイターとして常に新しい発想のできる人

時代が読める人。国際感覚を持った人。行動力のある人。色彩感覚の優れている人。ヒューマンな人。こう言う事を内蔵し、デザイナーとして社会に影響を与える人。

2.技術力豊かな職能人

絵を描く事に秀でている人。素材に明るい人。染色の達人。織物に詳しい人。メカ(コンピューターも含む)に強い人。このような技術力により、クリエーターの発想を具現化する人達。この両者の良いリレーションシップが次代のテキスタイル産業の中でのデザイナーのキーワードだと考えます。

## ディスカッション

**近沢**｜日本の繊維産業は停滞していますが、この産業に従事している人は300万人。

そのうち、生産に関わる人120万人（10%）流通に関わる人170万人（15%）と相変わらず日本の基幹産業です。その中でのテキスタイルデザイナーの役割について、また学校のデザイン教育、企業での人材育成についてディスカッションを進めます。

先ず、学校でのデザイン教育についての私の意見。今のテキスタイルデザイン教育は余りにもアートに片寄りすぎている感じがする。企業のデザインマネージャーの立場としては、3〜4年生くらいでアート系とビジネスデザイナー（インハウスデザイナーやフリーデザイナー）として通用する2コースに分けたらどうか。なぜこう考えるかと言うと、我々の時代には企業の中で5〜10年かけて育ててもらえる環境にあった。そのためには3〜5年間に3〜4,000万円の投資が企業とし必要で、今はそのような余裕はない。だから学校教育のカリキュラム、それ以前の学生を教える教員の資質の問題は企業にとっても非常に気になる。

では、テキスタイルデザイナーの現状、教育のあり方、産業構造のあり方について各々に質問します。

**近沢**｜新井さんはテキスタイルを企画し作り、アパレルメーカーに販売されている。企業として人材育成も含めて産業に貢献される中で今いちばんの問題点を一言。

**新井**｜自分が選んだプロの道に対してビジョンを持っていない若い人が多いということが一番の問題点だと思います。人間は才能の前に何をやりたいかという自覚で成長できるもの。また、学校側は送り出した学生がどういう働き方をしているか、もうちょっと産学の間にコミュニケーションがあっていいのでは。

今の話に関連して、昨年、我社で採用した社員について。彼等は学校で実際に筆を使い、絵具を調合し、形を描いていなかったので、社内でギリシャ、エジプト、最近のモダンデザインの模写をさせた。8ヶ月目頃から線がかけ、色がつけられるようになりテキスタイルデザインが描けるようになった。コンピューターによる光での色、操作での模様でなく、自分の手と頭を使って絵を描くと言う原点を教えた。それとデザインの様式美、デザインの歴史をきちっと教える。5〜10年たった時に、身についたこれらのことが役立つだろうと私なりに勝手に思っている。これについて、教育現場から梅田さん、松本さんにご意見を。

**梅田**｜教育期間によって異なるが時間数の多少はあるが実施されている。大学では、技術を学ぶ事、トータルで考えられる事、感性を磨くことが望まれます。

**松本**｜大学4年間は、とても短く、今の学生は、情報の渦の中にいるようなもので、興味のあること、気になることが多すぎるし、又一般基礎も含め修得しなければならない事がとても多いのです。

大学学部4年間は幅広い基礎を身に付ける期間と思っています。

**わたなべ**｜限られた中での大学教育と、企業が要求するものが一体とならないのが実態です。その間に人材教育のシステムがないと対応できないのではないか。また、人間の感性の基本としての物作りの根本が何であるかと言う基本勉強をしておけば新しい時代に対応できるのではないか。だから大学では基本教育に力を入れている。

**近沢**｜山本さんは日本だけでなく世界のフェアに出展されている。フリーランサー

として山本さん以下、京都にはデザイナーが多数おられるが、我々の視野に若いデザイナーが入ってこない。埋没してしまっているのでは。山本さん達に続いて、これから世界へ発信してゆける若いフリーランサーが育っているのか、またそう言った芽が出てきているのか。

**山本**｜伝統的スタイルを重んじる京都で、先輩に反論することなく、従っておられるのか?現時点で、若い層のデザイナーの目立った活動や提言はないようです。尚、実践の場での新人育成システムがあったとしても、職能に片寄らざるを得ないのが現状です。次代のデザイナーには、日本に縛られる事なく、グローバルな視点での“考え方、行動、交流”を望みます。

**尾崎**｜大きな組織である日本図案家協会として、今後は、ただ図案を描くだけでなく、プランナーとして、またコンピューターなども導入したデザインに対応できるような人材教育を考える必要がある。

**近沢**｜経済大国の日本で、欧米に比べてテキスタイルデザイナーの地位が低い、報酬も少ない。これが将来欧米並みになるのかどうか。

**新井**｜日本はソフトに対してお金を払うという土壌がないのです。根本には、洋服はヨーロッパからやってきたものが土台でそのコピーから抜け出せないでいます。コピーなら、デザインコストは安い方がいいということになるのは当たり前。そういう構造の中にテキスタイルデザインはある。

**梅田**｜その人の能力、対応によるでしょう。トータルで物を考える企画出来る人の地位、報酬はそれなり認められるだろう。

**山本**｜あくまでも“個人の資質”が問われる仕事であって、個々の評価の差は、今以上に開くはずです。

**近沢**｜インテリア業界も戦後50年、欧米のコピー商品が氾濫した時代から、いかにオリジナルな日本のテキスタイルを作るかをテーマでやってきているが、世界の中で競争すると、日本のインテリアの歴史の浅さ、層の薄さを含めて勝てないのが現状です。その他にご意見を。

**新井**｜創工商の分業化が進んでいますが、これからは三位一体の時代がやってくるといわれている。そうなれば、テキスタイルデザイナーの活躍の場もあると期待しています。

**大森**｜海外からの輸入も増え、ますます厳しくなる産業の中で、デザイナーは常に戦わなければならない。また、教育と企業の問題もあるが、各々の問題として努力が必要。